木こりの宝　　パンジャブ

昔むかし、あるところに、年とった貧(まず)しい木こりがいました。木こりには、息子(むすこ)が五人ありました。

あるとき、木こりは、死ぬときが来たとさとると、息子たちを呼(よ)んでいいました。

「息子たちよ。神さまがわたしを呼んでおられる。わたしが死んだら、母さんにはやさしくするんだよ。それから、ベッドの下の薪(まき)のたばの中に、おまえたちにやる宝を残しておこう。宝には秘密(ひみつ)が隠されているがそれは自分たちでさがすのだ。ただ、ひとつだけ、覚えておいてほしいことがある。薪のたばは素手(すで)で開かなければならない。さもないと、宝がたいへんな危険にさらされることになる」

そういうと、木こりは目をとじました。そして、二度と目を開けることはありませんでした。

お葬式(そうしき)もすみ、喪(も)が明けると、息子たちは父親の残した宝のことを思い出して、ベッドの下から薪のたばを引き出しました。薪のたばは、しっかりとしばってありました。

一番上の息子が、たばを開こうとしました。けれども、どうしてもひもがほどけませんでした。そこで、ナイフでひもを切ろうとしました。二番目の息子がいいました。

「だめ、だめ、道具を使っちゃいけないよ。素手で開かないと。でないと宝が危険にさらされる」

二番目の息子も、たばを開こうとしましたが、やっぱりひもはほどけませんでした。そこで、三番目、四番目、五番目の息子と、やってみましたが、だれひとりひもをほどくことができませんでした。

とうとう、みんなは、腹を立てて、口ぐちにいいました。

「斧(おの)を持って来よう」

「それはいけない。宝に傷をつけてしまったら、一文(いちもん)にもならないじゃないか」

「じゃあ、ナイフだ」

「いや、一番いいのは、火をつけて燃(も)やすことだ。宝が黄金(おうごん)だったら、そのまま灰(はい)の中に残る」

どうやったら宝が手に入るのか、一番りこうなやり方は何か、みんなは、わいわいいい合いました。

そこへ、父親の古い友だちがたずねてきました。父親の友だちは、五人がひどくがっかりして、亡(な)くなった父親に腹を立てているのを見て、いったいどうしたのかとたずねました。息子たちは、宝を自分たちだけのものにしたかったので、はじめのうち、ほんとうのことを話しま

せんでした。けれども、父親の友だちがしつこくたずねるので、とうとう、遺言(ゆいごん)のことを打ち明けました。

「お父さんは、この薪のたばの中に、宝を残してくれたんです。けれども、どうしてもたばを開くことができません。たばは素手で開かなければ、宝が危険にさらされるんです」

それを聞くと、父親の友だちは、ほほえんでいいました。

「では、ひとりずつ前に出てたばを開いてみなさい」

息子たちは、次つぎに前に出てやってみました。けれども、だれも開くことはできません。すると、父親の友だちはいいました。

「それでは、ふたりでやってみなさい」

そこで、ふたりでやってみました。が、やはり開くことはできませんでした。

「では、三人でやってみなさい」

それでも、開きません。

「では、四人で」

やっぱり開きません。

「では、五人みんなでやってみなさい」

五人がかりでひもをほどきにかかると、薪のたばは、苦もなく開きました。

五人の息子たちは、宝を取り出そうと、かけよりました。そして、薪のたばをかき回しました。ところが、何もありませんでした。

父親の友だちは、笑(わら)っていいました。

「君たちもばかだな。君たちのお父さんは、貧しい木こりだった。金や銀など持ってはいなかったと思うよ。そういう宝を君たちに残せるはずがない。隠された宝の秘密が何か、もう分ったかい。君たちは、ひとりひとりでは弱いが、みんなが力を合わせれば、常(つね)に強い。これが、お父さんが君たちに残してくれたりっぱな宝だよ」

木こりの息子たちは、こんなりっぱなものを残してもらったことを、神さまに感謝(かんしゃ)しました。

おしまい

村上郁再話

資料『世界の民話19パンジャブ』関楠生訳／ぎょうせい